広島市医師会

健康メモ

漢方薬を見直す

広島市医師会副会長
山肩内科クリニック院長　山肩　俊晴

私が漢方薬を処方し始めたのは昭和48年だから三四年も前の話になる。昭和51年から漢方エキス剤が保険採用になったのだが、当時は医者が漢方薬を使うことは珍しかった。

一般医の中には「あんなもの効くか」「あれを飲んでいると癌になる」というとんでもない話が公然と語られていた。無知がなせる業であった。

今では大学病院をはじめ医師の八〇％が漢方薬を使用するに至っている。あらためてその効能が見直されてきているのである。

戦前から漢方薬というのは根強い人気があり、その効能の恩恵を受けている人は世間に吹聴しないだけでひそかに愛用していた。

明治時代、文明開化の囃子（はやし）の中で西欧の独医学が採用され、東洋医学の漢方と漢方医は日本医学史上から抹消される。その結果、漢方は永く日陰の身として極く少数の薬剤師と医師によって語り継がれその命脈を今日に伝えられたのである。

漢方医学をことさらに無視し、誹謗中傷してきた権威者たちが漢方の不思議に目覚め、その有用性を学会誌に発表するに至っては隔世の観がある。

明治維新、廃仏毀釈によって伝統ある仏像や経典が失われ、浮世絵などの世界に誇る民間芸術品が紙クズのように捨て値で海外に流れ出した。今、これを思い出す。

古き佳きものが壊滅し貴重な文化財や伝統医学が放置され続けてきた損失は計り知れない。確かに西洋医学の進歩発展は目を見張るものがある。以前には助からない生命も助かっている。先端医療の開発によって難病も救われ不治の病も明るい光明が見え始めた。

だが、西洋医学から置き去りにされた不定愁訴、冷え症、ほてり、のぼせ、動悸などや薬物アレルギーのある人には漢方薬が救世主となり得るのである。

団塊の世代が、続々と老人層の仲間入りを始める昨今、大自然の中から産み出され、掘り起こされ、集大成された体系的な漢方医療が見直されてよいのではなかろうか。

中高年の健康管理に更年期障害に悩む人たちにとって漢方薬は福音の鈴の音になると思う。